

富士山麓でフジタイゲキを再発見

文 杉野孝雄 写真 三宅 隆



東富士演習場で発見されたフジタイゲキ

フジタイゲキの花

フジタイゲキは静岡県固有亜種で、和名は富士山麓で発見されたことに由来する富士の名がつけられている。タイゲキ（大戟）は中国で根を漢方薬「京大戟」として利用する、ナツトウダイに似た *Euphorbia pekinensis* Rupr. のことで、江戸時代日本で *Euphorbia* の仲間を命名するとき、中国のこの植物を充てたことに由来する。日本では *Euphorbia* の仲間に広くタイゲキ（大戟）が名付けられている。

環境省のレッドデータブックの調査では、当時、絶滅危惧ⅠA類（CR）に指定されていたこともあり、富士山麓を始め県内の記録にあるすべての産地などを綿密に調査した。フジタイゲキは花期に苞葉が黄色に色づくので、遠方からでも見つかるにもかかわらず発見されず、絶滅したと思われた。原因とされたのは開発と植生の遷移である。

ところが、記録にない静岡県西部の島田市の静岡空港建設地で1996年に30株ほど発見され、それがきっかけで掛川市や菊川市でも発見された。いずれもススキやネザサの群生地で、茶草場として利用するための草刈りが定期的に行われ、植生の遷移が制限されていた場所である。

今回発見された産地は御殿場市の東富士演習場の一部で、ススキの群生地である。標高は700～800m、1,000～1,500株ほどが生育している。環境省のレッドデータブックの調査の時も東富士演習場内の調査をしているが、立ち入りが厳しく制限されていたので、十分な調査ができずにいた場所である。調査は2019年7月22日と28日に実施した。満開を過ぎていたが昆虫が訪れていた。標高が高いこともあり、静岡県西部の花期5月下旬～6月より少し遅れている。

茶草場の生育地と比較すると、ススキの群生地の中にも生育するが、それよりも道に沿ったススキの被度のやや低い場所に広く見られる。土壌はスコリアである。下層の植生は茶草場より豊かで、目立ったのはナフシロイチゴ・フキ・ヤマアワでシダ植物のヒメシダ・コウヤワラビがある。シダ植物の両種は湿地や湿度の高い草地に広く見られる植物で、自生地が適度な湿度が維持されている草原であることを示している。静岡空港の自生地では並立する斜面で、下部に湿地のある側にのみフジタイゲキが生育していたことから、フジタイゲキの生育には適度な水分が必要であることが知られているが、それが満たされていることが推定される。その他、周辺で見られる植物にはカセンソウ・ヨモギ・オカトラノオ・ノアザミ・フジアカショウマ・ドクダミ・チガヤ・テリハノイバラ・ヒメジオン・ウツボグサ・クサレダマ・ワラビ・スギナなどがある。